

「お父さん大きに有がとう。お、お旨し、お願ひどすモウ一つ」

「コレお花や何を言ふのんや、そないに食べたたら病氣に障はるといかん。モウ止めときなされ。お母さんは悪い事を言わんで」

「それでもこんなお旨い物を食べて死んだら妾は本望どす。モウ一つ」

手を合はして頼みますので、子に甘いは親心、悪いと知りながら三つ目の糝粉餅を渡しますと、それを半分程食べかけると、急に顔の色が段々變つて來ましたので、兩親はびつくり致しました。お醫者さんを呼びに遣りますやら騒動で、

「お花や……」

「コレお花や……」

と呼べど叫べど其甲斐もなく遂々息を引取りました。扱てこうなると一家親類へ使いを出して報せました。御親類は早速馳け付けました。御兩親の歎きは一通や御座りません。娘の遺言どほりお化粧を致しまして、立派な着物を着せて三百兩の金子を財布へ入れて、首へ掛けさせまして棺桶に納め四條の寺町の菩提所大雲寺へ泣く／＼野邊の送りを致しまして、遺言どほり土葬にいたしました。皆の者は引上げて歸つて參りました。

「イヤ皆様御苦勞さん、さぞ疲勞たぢやろう。何彼の事はまた明日の事にして皆寝んどくれ」

手傳ひの人々は歸りました。奉公人は皆二階へ上つてゴロツと横になりますと晝の疲勞でぐウツと寝て仕舞ました。御夫婦は奥の座敷でお寝みになりました。家内は静かになり、夜も更け渡る丑滿頃二階に寝て居た久七と言ふ若い者が、フツと眼を覺しました。(ポーン鐘の音)

「ア、ア、ア(欠伸)ア、葬式の出た跡と言ふものは、何となしに淋しいもんやなあ。併し御當家の御主人様は實にお氣の毒なお方やな。唯つた一人の嬢やんを十八までもお育てなさつて死して仕舞とは、其れに引替へアノ三味線はお向ひの嬢やん、年も丁度同年、今夜は御親類のお客さんがお泊りなはつて其の慰みに弾いて御座るのんやが、親達の身になつたら何んな氣がすると思ふと、實にお氣の毒なもんや。そう／＼嬢やんで思ひ出したが何程財産が有り餘つて有ても、死んだ人に立派な着物を着せて其の上三百兩と言ふ大金を地中へ埋るとは實に勿體無ことや、幸ひ皆が寝て居る間に掘出して來てやろう」

そつと二階から降りて參りまして、裏口の切戸を開けて外へ出ますと、其まゝ大雲寺へ遣つて來ましたが表門は閉つて居りますので裏へ廻りました。一面の茨垣を搔分けて中へ這入りまして墓場へ來て見ますと晝見たまゝで、未だ線香の烟も絶へません。久七は新しい墓の前に手をついて、

「モン嬢やん久七は決して悪心でお金を取りに來たのや御座りません。通用金を土の中へ埋めるのは御法度で、若し埋めたと云ふ事が政府へ知れましたら御一家は嚴しい御詮儀を受けなければなりま